

徳島県野鹿池湿地周辺における完新世植生史

○三宅 尚・高田知佳・中川 赳・石川慎吾（高知大・理・自然環境）

四国山地では、完新世初頭まで遡り、しかも連続した花粉記録はほとんど得られていない。このため、現在、この地域に分布するブナの優勢な冷温帯落葉広葉樹林や、暖温帯と冷温帯の移行域に発達する中間温帯林の成立時期と変遷の詳細は不明の部分が多い。

野鹿池湿地は、徳島県と高知県の県境付近に位置し、野鹿池山（標高 1,294 m）の山頂付近の、緑泥片岩を基盤とする凹地に発達した小さな湿地である。本研究では、湿地中央部（北緯 33 度 51 分 5 秒，東経 133 度 42 分 13 秒，海拔 1,195 m）で採取された堆積物試料の花粉分析と炭化片分析を行い、当地域の完新世の植生史を調べた。

花粉・胞子の組成と出現率の垂直変化をもとに、NGN-I から NGN-IV の 4 つの局地花粉帯を設定した。各花粉帯の下限の年代は狭在する鬼界—アカホヤ（K-Ah）火山灰の降灰年代と有機物試料の ^{14}C 年代に基づき算出した。

花粉分析結果から推定される各花粉帯の植生は次に示す通りである。NGN-I 帯（約 10,100—7,100 yrs B.P.）には、ブナ、コナラ亜属およびクマシデ属（イヌシデを除く）を主体とし、ヒノキ科に加え、サワグルミ-オニグルミ、イヌブナ、カエデ属、トチノキ、トネリコ属などが混生する落葉広葉樹林が分布していた。NGN-II 帯（約 7,100—3,300 yrs B.P.）には、NGN-I 帯と同様、ブナとコナラ亜属が優勢で、ヒノキ科を含む落葉広葉樹林が成立していた。この落葉広葉樹林の樹種組成は NGN-I 帯と大差ないが、クマシデ属（イヌシデを除く）とトネリコ属が量的に減少した一方、ツガは本帯上部に対比される時期に増加した。また、アカガシ亜属が本帯から分布を拡大した。NGN-III 帯（約 3,300—100 yrs B.P.）には、ブナとコナラ亜属などの落葉広葉樹を主体とし、ツガを混生する温帯性針広混交林が成立していた。NGN-IV 帯（約 100? yrs B.P.—現在）には、スギの植林に起因すると推定される、ブナを主とする落葉広葉樹林の衰退とスギ林の拡大が認められた。

野鹿池湿地周辺において、ブナは完新世初頭にはすでに落葉広葉樹林の主要樹種として存在しており、ブナの成立時期は少なくとも晩氷期に遡る。ブナは K-Ah 降灰期以降に次第に増加し、ツガもほぼ同時期に増加を始めた。NGN-II 帯に分布を拡大したアカガシ亜属は、NGN-I 帯に入ると量的に減少し不安定化した。これらの植生変化は、花粉化石以外の気候変化を示唆するプロキシから指摘されている、K-Ah 降灰期以降の降水量の増加と減暖化に起因すると推定される。

本湿地の炭化片は NGN-II 帯下部と NGN-III 帯でやや断続的ながら相対的に多く産出した（最大で $3.3 \text{ mm}^2/\text{ml}$ ）。しかし、粒度自体はいずれの層準でも 10 を上回ることはなく、本湿地周辺における火災の証拠としては疑わしい。